

「人生に、文学を。」オープン講座第1回を共催して

——文学は「あなたがそれをどう読むか」だ

沼野 充義

「人生に、文学を。」というのは、芥川賞・直木賞を運営する公益財団法人日本文学振興会が2016年に大々的に打ち出したプロジェクトである。文学関係の企画としては異例なことに、多くの大企業から協賛を受け、2016年7月に新聞に全面広告を出して、アニメを文学よりも下に置くかのような宣伝文句が世間で大きな話題になっていたようだが、私はうかつにもまったく知らなかった。このプロジェクトのことを初めて知ったのは、日本文学振興会の依頼を受けて実施を請け負った電通の担当者が相談のため研究室に来られたときのことだった。

作家が推薦する文学書を課題図書として指定し、当の作家に来ていただいて小人数の聴講者とディスカッション中心のイベントを行うという趣旨だとの説明を受け、それを大企業から多額の協賛金を受けて電通が実施するというところには違和感があったのだが、まあ、イベントの中身について相談しながら、共催の形で企画していけばそれなりに面白いことができるのではないかと考えてお引き受けすることにした。それに、普段あまりお付き合いすることのない日本文学振興会や電通の人たちの仕事ぶりを身近に見てみたい、という好奇心がなかったと言ったら嘘になるだろう。

その後、イベントの中身については残念ながら当初期待したほど話し合いができないまま、予定だけが先行する形となって実施の運びとなったが、現代文芸論研究室としては、日本文学振興会が指名してきた作家に対して適任の文学部教員を司会進行役としてつけるということで、共催者の責任を果たさせていただくことにした。

その結果、2016年11月6日（日）に東京大学法文1号館文学部115番教室で実施された「人生に、文学を。」第一回オープン講座では、村山由佳さん、西村賢太さんのお二人の人気作家に対して、それぞれ柳原孝敦（ラテンアメリカ文学、現代文芸論）、阿部公彦（英文学、文芸評論）が司会となって、約50名の聴衆を前にトークセッションと活発な質疑応答を行うことができた。

私は現代文芸論の責任者として、村山・柳原セッション、西村・阿部セッションの後にそれぞれ短い結びの言葉を述べさせていただいた。以下に、その言葉を掲載する。実際には時間の制約から一部省略し、全部は読み上げていないが、これはイベントのために前夜に徹夜で書いた文章の全文である。

なお東大で行われたイベントの様様については、日本文学振興会のホームページに概要掲載される予定と聞いている。（<http://www.jinsei-bungaku.jp/>）

結びの言葉1（村山由佳・柳原孝敦セッション）

「人生に、文学を。」オープン講座を、日本文学振興会の共催者として東京大学で行うことをお引き受けした現代文芸論研究室を代表して、一言、最後にご挨拶申し上げます。

まず講師としてわざわざお越しくださった作家の村山由佳さんにお礼を申し上げます。また見事な司会役で今日のトークを盛り上げてくれた柳原孝敦さんもお疲れ様でした。そしてなによりもご来聴いただき、熱心に討論に参加してくださった受講者の皆様、ありがとうございました。

いまどき文学は明らかに劣勢です。映画に負けています。ひょっとしたら漫画にも負けているかもしれない。大学入試の科目にも国語というのはあっても文学はありませんから、十代の若者は誰も文学を真面目には勉強しません。

それでも文学は大事だ、そして面白い、ということをお願いたくて私たちはここに集まっています。じゃあ、文学はいったい何の役に立つのか。日本文学振興会は電通の協力を得て、「人生に、文学を。」というキャッチコピーを使ってキャンペーンを始めました。その第一回イベントの記念すべき最初の講師が村山由佳さんとなったわけです。しかし、カッコいいコピーがどのくらい実質的な意味を持つかは疑問です。

村山さんの小説を読んで、モラル・ハラスメントについて考えることはできます。それは大事なことです。しかし、そういう問題を抱えている人が村山さんの小説を読んだら、問題がすっきり解消するのかといえば、必ずしもそうは言えないでしょう。昔チャーホフという作家は、文学の使命は問題を解決することではなくて、問題が何であるのか正確に示すことだ、と言いました。そこが肝心なのです。文学はすぐに病気を治してくれる特効薬を処方する医者でもなければ、聞いた風な安っぽい決め台詞で何か分かったような気にさせる人生相談でもありません。

文学が問題を示すだけで、解決をしてくれるわけではないとしたら、いったい文学とは何なのでしょう。まず強調しておきたいのは、文学を読むのは体験だ、ということです。文学を読むのは、受験勉強のときのように何らかの知識を得るためではありません。本を読むこと自体が、人間にとっての体験なのです。何らかの体験をしたら人間は多少なりとも成長し、変わります。知識は忘れてしまえばそれまでですが、読書という体験は——たとえば読んだ小説の筋書きや登場人物の名前を忘れたとしても——一生、読んだ人間に残ります。いい本を読む前と読んだ後では、あなたは少し変わっているはずだし、世界は少し違って見えるはずです。

そうはいっても世界には、すでにとつて読み切れないほど圧倒的に膨大な文学がすでに蓄積されています。それをどう選んでどう読んだらいいのか。少し前だったら、文学全集というものがあって、とりあえずそこに収められている名作と言われる作品を読めば安心でした。しかし、いまは世界文学の様相がだいぶかわり、価値観が多様化し、あまりに膨大になってしまったために、現在進行中の世界の文学には、これを絶対に読まなければならない、これだけ読んだら大丈夫、といった必読書リストはあり得ません。

じゃあ、どうしたいのか。結局のところすべては「あなたがそれをどう読むか」なのです。今日のような出会いを大事にして、出会った面白そうなものをとりあえず自分なりに読み進め、つなげたり広げたりしていく。その営みこそが文学を読むということなのです。読むべきいい本はすでに読み切れないほどたくさんあります。だとしたら、たまたまでもいい、出会いを大事にして、出会いに会いをかさね、たまたま出会った本たちを環のように広げていく。井伏

罇二は中国の詩を訳して「さよならだけが、人生だ」と表現しましたが、とんでもない。私に言わせれば、「出会いだけが人生」なのであり、同様に「出会いだけが文学」なのです。

最後にもう一つ、「誰もあなたの代りに本を読んではくれない。文学の世界を切り拓くヒーロー、ヒロインはあなた自身だ」と強調しておきたいと思います。私たちは自分で本を読んでいる気になっていても、じつは人の考えの枠組に縛られて本を読んでいることが多い。耳に快いキャッチコピーをうのみにしてもいけません。しかし、文学の言葉は違う。亡命ロシア語詩人プロツキーは、かつてノーベル賞受賞講演（1987年）でこんなことを言っています。

（……）たいいていのものは、他人と分かちあうことができる。パンも、ベッドも、恋人でさえも。しかし、例えば、ライナー・マリア・リルケの詩を他人と分かち合うことはできない。芸術全般、特に文学、そしてとりわけ詩は人間に一对一で話しかけ、仲介者抜きで人間と直接の関係を結ぶ。

絶望的に膨大で多様な文学の世界に一人で立ち向かうのは、ちょっと心細いかもしれません。だからこそ、こういう場で作家を囲んでみなで一緒に本について語り合うことが大切なのです。でも本を読むのは最終的には孤独な営みであり、文学作品に一人で向き合うのはあなただけです。他の誰かに読んでもらうわけにはいきません。当たり前のことですが、それはものすごく素敵なことでもある。だって、世界文学という冒険の旅のヒロイン、ヒーローは、作家でもなければ大学の先生ではなく、文学を読むあなたなんですから。大学の文学部は、本を読むあなたがヒーロー、ヒロインになるのを手助けする場にすぎません。でもそういう場を確保するのは大事なことだと思います。

結びの言葉 2（西村賢太・阿部公彦セッション）

「人生に、文学を。」オープン講座を日本文学振興会の共催者として東京大学で行うことをお引き受けした、文学部現代文芸論研究室を代表して、一言、最後にご挨拶申し上げます。

まず講師としてわざわざお越しくくださった作家の西村賢太さんにお礼を申し上げます。また見事な司会役で今日のトークを盛り上げてくれた阿部公彦さんもお疲れ様でした。そしてなによりもご来聴いただき、熱心に討論に参加してくださった受講者の皆様、ありがとうございました。

このイベントのコンセプトを考えたのは、芥川賞・直木賞を主催している日本文学振興会とその母体である文芸春秋です。その趣旨にいわく、「文学は、人生と無関係なものではありません。大学という学びの場で、改めて文学とあなたの人生を見つめ直してみませんか。」「このイベントは文学部を有する日本全国の大学で（中略）さまざまな参加者とともに「本を読むこと」について語り合うもの」です。ただ正直なところ、共催者の私もこれにはよくわからないところがあります。文学がコンピュータによって書かれるようなSF的未来ならばともかく、現在、文学が人間によって書かれ、人間によって読まれている以上、文学が人生と無関係なわけはありません。むしろ問題は、人生に大いに関係があるはずの文学が、実際にあまり多くの人に読まれなくなっているという現状でしょう。考えてみれば、この世の中を支えているのは国家の大事を考える政

治家や役人や、過労死するほど猛烈に働かなければならない会社員でしょうが、彼らは忙しくてとても小説などという役にたたないものを読む暇はないでしょう。また世界の未来を担うべき若者たちには映画、漫画、アニメ、ゲームなど、文学よりもっと面白いものがある、やっぱりどうも文学どころではないらしい。

しかし、そうであるにもかかわらず、この企画ではその文学を通じて人生を見直すことを、しかもよりによって大学の文学部といういまどきあまり人気の高くない場で試みようとする提唱しています。これはおそらく反時代的もの言いとも言えるかもしれません。ちょうど昨年文部科学省は全国の国立大学あての通達で、世の中の訳に立たず、社会的需要の少ない文学部は改組したり、廃止したりするようにと指示を出したところでした。それなのに、いま私たちがやろうとしているのは、その役に立たない、文部科学省からも切り捨てられそうになっている劣勢の文学をあえて盛り立てようというプロジェクトです。その趣旨を心意気に感じ、これならばいっしょにやれるかもしれない、とお引きうけた次第です。

とはいえ、文学の効用は何なのかと問われても、私には自信をもって答えることができません。ある小説を読んだことが人間にどのような影響を与えるかについては、予測しがたいものがあります。藤澤清造の小説を読んで、西村賢太さんのような著名な作家になって大学で講義をするまでになる方もいますけれども、その一方で、人生がいやになって死にたくなる人もいるかもしれません。ドストエフスキーの『罪と罰』を読んで、信心深いお坊さんになる人もいるでしょうけれども、革命家になって権力者を暗殺するテロ事件を起こす人が出ないとも限りません。

ただこの問題については、いつも思い出す言葉があります。ロシア出身の詩人ヨシフ・ブロッキーがノーベル賞受賞講演で言った言葉です。

芸術全般、特に文学が社会において少数派の財産（あるいは特権）でしかないという状況は、不健全で危険なことのようには思われます。私は国家の代わりに図書館にさせろなどとは——実際には何度もそんな考えが心をよぎったものですが——申しません。しかし、もしもわれわれが支配者を選ぶときに、候補者の政治綱領ではなく読書体験を選択の基準にしたならば、この地上の不幸はもっと少なくなることでしょう。そう私は信じて疑いません。われわれの支配者となるかも知れない人間にまず尋ねるべきは、外交でどのような路線を取ろうと考えるかということではなく、スタンダーや、ディケンズ、ドストエフスキーにどんな態度をとるかということである——そう私は思います。

（ヨシフ・ブロッキー『私人 ノーベル賞受賞講演』より、邦訳は群像社刊）

これは、いささか奇矯な言葉と思われるかもしれませんが。私はなにもここで「文学を、政治に」というプロジェクトを大学ではなく、国会議事堂でやったほうがいいなどという過激なことを主張したいわけではありません。しかし、文学が人間性にとってそれほど大事だと考える人がいるということには、力づけられます。文学は面白い。そして大事だ。しかし、そのことを理解するためには、どんどんいい本を読まなければなりません。私たちのイベントの意味もそこに尽きます。私は機会があったらぜひ安倍首相に西村賢太をどう思うか、プーチン大統領にラスコーニコフはいいやつだと思うか、聞いてみたいと思っています。